OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	初期の「エセー」におけるエセイエの方法
Author(s)	竹田, 英尚
Citation	Gallia. 1971, 10-11, p. 160-171
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5515
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

初期の「エセー」におけるエセイエの方法

竹　田　英　尚

一

「エセー」は，現在の姿のうちに，著者の執筆開始以来晩年の加筆訂正に至る20余年の歳月の流れをとどめている．一人の人間の変化成長の様を「エセー」が映していることは，モンテーニュ自身「エセー」に与えた評価の一つでもある．それは，思想に限らず，「エセー」の形式にも，顕著に反映されていて，随想の展開の姿や章の構成の様な表現形式を捉え，モンテーニュの変化と成長の様を再現することもできると思われる．表現形式の相違は著者の思索の態度の相違であり，その変遷は思想のさらに内側からモンテーニュの道程を描くこととなる．また，多面な性格を持ち且変化しているモンテーニュ自身の「エセー」観も，その具体的な表われである表現形式によって確められ，相互の関連と連続した姿のもとに統一できるであろう．

表現形式を視点に「エセー」の変遷を追うならば，「エセー」が現在の姿になるまでの過程に鑑みて，1588年以後の加筆訂正はしばらく除き，第一巻と第二巻については1580年版の「エセー」，第三巻については1588年版の「エセー」に拠るのが，変遷の段階を明確にする上で適当である．1580年版「エセー」第一巻，第二巻の随想と，1588年版「エセー」第三巻の随想の間には，内容，形式，いずれにおいても，一読して明らかな相違がある．さらに，1580年版「エセー」についても，P. Villey の年代決定に従えば，第一巻，第二巻の各章は，1572年から1573年頃書かれたと推定されるグループと，1577年頃から1580年に書かれたと推定されるグループにわかれ，執筆年代に明瞭な二時期の区別が存

在する[1]. こうして1572年頃の執筆開始時から，1588年第三巻発刊に至るまでの推移発展を，仮に三段階にわけることができる.

この小論は，上述の展望のもとに，最も初期の随想を対象としている. 1580年版一，二巻中の随想を比較する時，モンテーニュの個性の生き生きとした姿の表われ始める1580年近くの随想に比べ，1572年から1573年頃書かれた最も初期の各章は，殆ど引用された事例や物語，哲学の諸説に覆われて，モンテーニュの影は薄く，個人的色彩は乏しいと言われている. しかし，前期と後期にそれぞれ特徴的なタイプを比較する時，個性と没個性の相違は判然としているとしても，前期後期いずれにも中間的なタイプの章もあり，両者の間は不連続ではない. 当然ながら，前期の随想形式の発展的な変化として後期の随想がある. 読書から得た事例や哲学の諸説の集録の様な著作は，モンテーニュにとって，どの様な意味があり，何をもたらしたのであろうか.

二

前期第一グループに属する最も初期の章の多くは，モンテーニュが読書の折々に興味を引かれた，歴史的な事例や物語や古人の思想の収録簿といった姿をしている. モンテーニュの関心は専ら収集，記録に向けられているかの様であり，モンテーニュ自身の個性の彩りは乏しい. 初期の「エセー」の著作が，読書と並行していたことは容易に想像できる. ≪J'y estois a cet'heure sur ce passage ou Plutarque dict de soy mesmes, que...≫ (II-IV, p. 36-80, p. 364-V. et S.)[2]の如く，ある時は，彼の言葉がそのまま読書との密接な関係を告げている. この事実は，しかしながら，初期の「エセー」の著作が読書と性格の変らないものであったのではなく，逆に読書とは違った意味を与えられていたことを示唆している. 「エセー」を書くことの内には，書物に学べるものをさらに積極的に吸収し，活用する態度があった. 読書に対する受動から能動への態度の転換としての意味が宿っていると考えられる. 我々は随想の構造の分析を手掛かりにその意味を推察できる. 事例や物語の集録で構成されている最も書誌的なタイプの随想は，構成の観点から，さらに三つのタイプに大別され—(1)事例の収集，羅列の姿をしているもの，(2)事例の集録が著者の意見

によって方向づけられ，推論の展開の構成となっているもの，(3)著者の意見のほか，借用した古人の思想が，事例を結ぶ糸となっているもの—これらのタイプのそれぞれの特徴が，「エセー」を書くことの意味を暗示している．

I-XLIX「昔の習慣について」は，習慣を論じている冒頭の短い論を除いては，すべて色々な習慣の事例の列挙に占められている章であるが，その列挙に先だってモンテーニュは次の様に言っている．

> Je veus icy entasser aucunes coustumes anciennes que j'ay en memoire, les unes de mesme les nostres, les autres differentes : afin qu'ayant en l'imagination céte continuelle variation des choses humaines, nous en ayons le jugement plus esclaircy et plus ferme.
>
> (I-XLIX, p. 452-80, p. 297-V. et S.)

事例の収集列挙が，モンテーニュにおける最も重要な思想との関係のもとに意味づけられている．人間の世界の事柄の「絶えざる変化」を念頭に置き，そうして，「さらに明瞭で強固な判断」を下せるようになる為に必要なのである．ちなみに，「絶えず変化する不定性」と「不統一な多様性」は，モンテーニュの抱く人間観と世界観の根本的な性格をなしている．それは，「エセー」を書き始める頃すでにモンテーニュの心を支配していた，思想というよりもむしろ，人間や現実を前にした時の基本的感情である．この感情は，前期の第一グループに属する章にすでに表われ（例：II—I），第三巻の思想に至るまで連綿と流れている．世界が，ギリシャ，ローマの蘇生とともに時間的な奥行きを加えて豊かになり，遠洋航海の発達とともに空間的に拡がった時代に生れ，宗教動乱の現実のただなかで成長したモンテーニュの心を，人間と世界を「絶えず変化する不定性」，「不統一な多様性」と見る感情が侵潤していったとしても不思議ではない．事例の収集，列挙は，この様な感情と一体となって，思索のための重要な基本段階となっている．まず，収集，列挙によって，「同じもの」(≪les unes de mesme les nostres≫)と「違うもの」(≪les autres differentes≫)の判別が可能になって来る．この判別は，人間の世界の事柄すべて(≪les choses humaines≫)は「絶えず変化する不定性」，「不統一な多様性」と心に映りがちなモンテーニュにとっては，我々の想像以上に重要な意

味を持っていたに違いない．次の言葉は，最も初期のグループに属する章Ⅱ—Ⅰの内，1588年版出版に先んじて加筆された言葉ではあるが，この事実が彼自身の反省によって語られているのを見ることができる．

; et quiconque s'estudie bien attentifvement trouve en soy, voire et en son jugement mesme, cette volubilité et discordance. Je n'ay rien à dire de moy, entierement, simplement, et solidement, sans confusion et sans meslange, ny en un mot. "Distinguo" est le plus universel membre de ma logique.

(II-I, p.8, t.III-M. et J., p.335-V. et S.)[3)]

つづいて，判別という行為は，「絶えざる変化」(≪céte continuelle variation≫) を自覚させ，「さらに明瞭で強固な判断」(≪le jugement plus esclaircy et plus ferme≫) を可能にする．モンテーニュにあって，判別は，抽象，単純化，統一へ向うためではなく，直接「多様性」を意識することにつながる．「さらに明瞭で強固な判断」を得るためには，抽象と統合が必要とされるのではなく，「渾沌とした多様性」と感じられた対象が，判別によって，「識別された多様性」と意識されることが必要なのである．事例の収集，羅列にすぎない姿の第一のタイプの随想は，仔細に分析すれば，「エセー」の著作を手段とした，まさにこの様な努力を表わしている．たとえば，事例の列挙が対照と比較による「判別」の構成となっている章（例：Ⅰ—ⅩⅢ)，直接引用している借り物の思想と事例の列挙も，相反する意見を組として並べ，彼自身が判断をくだすに先だって，区別しながら秤にかけている姿の章(例：Ⅱ—Ⅲ)，章を構成する小論と事例の五つの部分が，各部分をつなぐ ≪Toutes-fois≫，≪Si est-ce que≫，≪Et de mesme≫，≪Pour en dire le vray≫ の語句の連続にそのまま表われている様に，前の部分を否定しながら展開してゆく（ただし，≪Et de mesme≫の肯定の部分一ケ所）「多様性」を確かめる構成の章（Ⅰ—Ⅻ）など，最も書誌的な，個性の彩りの乏しい章にも，モンテーニュが，基本的感情の中で，明瞭で強固な判断へ向いつつある姿がうかがわれるのである．

モンテーニュは彼の書を「エセー」と題し，「エセー」の各所でも，著作の

根本的な性格を生来の判断力の試しであるとしている[4]. モンテーニュが，判断力を哲学の真の成果と評価し，抽象による総合や演繹の能力に重きを置いていないことは，第三巻の時代においても，彼がソクラテスを師と仰ぎ，アリストテレスを批判する態度に表われている．表題「エセー」の意味する「エセイエ」は，その対象や方法に変遷はあるとしても，終始変らぬモンテーニュの姿勢である．明瞭で，強固で，さらに柔軟な「エセイエ」を準備する判別の努力が，上記の様な基本的感情に由来していた様に，「エセイエ」の意識は，モンテーニュの基本的感情，ひいては人間観，自然観と一体となって生れている．次の言葉には，この密接なつながりが十分に読みとれるであろう．

Et si n'entreprans pas de *les (subjects) traiter entiers et à fons de cuve. De mille visages qu'ils ont chacun,* j'en prens celuy qu'il me plaist ; je les saisis volontiers par quelque lustre extraordinaire :

(I-L, p.461-80, p.302-V. et S.)

さらに，尚ボルドー市版の文章参照

Et ne desseigne jamais de les (subjects) produire entiers. *Car je ne voy le tout de rien : Ne font pas, ceux qui promettent de nous le faire veoir. De cent membres et visages qu'a chaque chose,* j'en prens un tantost à lecher seulement, tantost à effleurer ; et par fois à pincer jusqu'à l'os. (I-L, p.302-V. et S.)

A qui auroit prescrit et establi certaines loix et certaine police en sa teste, nous verrions tout par tout en sa vie reluire une equalité de meurs, un ordre, et une relation infallible des unes choses aux autres. Le discours en seroit bien aisé à faire : comme il se voit du jeune Caton, qui en a touché une marche a tout touché ; c'est une harmonie de sons tres-accordans, qui ne se peut démentir: *a nous au rebours, autant d'actions autant faut il de jugemens particuliers.*

(II-I, p.4-80, p.334-V. et S.)

モンテーニュが見ている人間や自然の事物は，≪mille visages≫ を持ち，≪une equalité, un ordre, une relation infallible≫ の反対の性格を特徴と

している．それらは，人間の能力で，全体を，底の底まで知り尽くせる程単純なものではない．一般法則を引き出しうる様な斉一性を有した，統一的な秩序のあるものではない．すべてのものの認識に援用できる原理は人間の望むべくもなく，一方の認識をそのまま他方の認識に適用できることも殆どないであろう．個々の認識の努力を通して明敏になった判断力だけが，当意即妙に発揮されうるものとして評価されるのである．「エセイエ」の意識は，「多様性」と「不定性」の基本的感情のうちに育まれ，人間観，自然観と係りながら方法論的な自覚となってゆくのである．

第二のタイプの章は，事例の配列が推論の展開の構成となっている．ただし第三巻の随想の様に，モンテーニュ自身の個性的な思想の展開の中に事例が組み込まれているわけではない．事例の集録の姿をしていても，一つの結論に向ってゆく論の運びとなる様に事例がつながれているのである．第一のタイプさえすでに単なる集録ではなく，事例はモンテーニュ的な意識の中で取り扱われていたが，推論の展開を構成させるには，事例に対して一層能動的な態度が必要である．事例の宿している「真理」を探求する姿勢がなければならない．「事例—モンテーニュの解釈—結論（章題が結論の働きをしている場合もある)」，この最も基本的なパターンの姿のまま残っている章（例：Ⅰ—Ⅲ）における様に，人間性や人間の生き方やその他人間に関する万般について事例の内包している意味を深く汲取らねばならない．Ⅰ—Ⅲでは，モンテーニュは事例を註釈しながら，人間の感情は，章題に示されている様に，我々を越えて死後の事にまで及ぶ事実を事例が意味していると解釈する．この様な関心と努力がモンテーニュの判断の試しの端緒であり，このパターンを基礎にして推論の展開の形をとる．たとえば，I-XXXVIIIの構成—「事例—解釈—他の事例を引用し，先の解釈の検討，立証—結論としての解釈」，I-XLV の構成—「事例—ある解釈—私の解釈—私の解釈の正しさを裏づける他の事例」，Ⅰ—Ⅱ の構成—「事例—解釈—解釈を裏づける例—自分の経験の分析による裏づけ—引用による分析の裏づけ—最初の解釈の意味する別の一面—前項に関する事例」．この様な構成は，事例に真理を学ぶ目的から出発し，他の「事実」と照らし合わせながら，それをより適切により深くしてゆこうとする意識の表われである．「事実」

こそ，モンテーニュにとって，人間を最も良く導く智恵と思想の宝庫であることは，初期においても変りはない．事例をいかに活用し，いかに学ぶかは，初心のモンテーニュの方法的な問題である．事例に覆われた没個性の外見をしていても，意識的，方法的に「事例」に学ぶ「エセイエ」の努力が内部にある．

推論の展開を示す事例の活用には，さらに別の「エセイエ」の態度がうかがわれる．事例の意味の探求を基本とすることに変りはないが，まず問題が提起され，その解答が直接事例の中に求められる．I-XXXIVの如く，「問題提起（あるいは仮定）—種々の事例を使って解答」の構成が，その最も基礎的な段階を示している．I-XXXIV では，運命の働きを問題とし，「正義の働きの様相をとる—事例，運命はしばしばわざとわれらをからかうように見える—事例」，以下全く同じ様な形式で事例を並べている．推論の展開の構成は，この基礎的なパターンの発展と考えられる．たとえば，I-IXの構成—「問題提起—自分の意見の展開—事例を使って立証」，I-XIVの構成—「問題提起—事例を使って問題を検討—自分の意見の展開—事例を使って裏づけ—結論」．これらの構成は，事例を活用して推論の陥りがちな抽象的な詭弁を避け，「事実」に即して論を運んでゆこうとする「エセイエ」の表われである．

> Voyla mes trois contes tres-veritables, que je trouve aussi plaisans et thragiques que ceux que nous forgeons a nostre poste pour donner plaisir au commun ; et m'étonne que ceux qui s'adonnent a cela, ne s'amusent de choisir plustost dix mille tres-belles histoires, qui se rencontrent dans les livres, ou ils auroient moins de peine, et apporteroient plus de *plaisir* et *profit* a autruy. Et qui en voudroit bastir *un corps entier et s'entretenant, il ne faudroit qu'il fournit du sien que la liaison, comme la soudure d'un autre metal...*
>
> (II-XXXV, p.583-p.584-80, p.749-V. et S.)

ここでモンテーニュが勧めている作品形式は，我々が今問題とした彼自身の作品の特徴にあたり，モンテーニュが方法論的な自覚を持っていたことがわかる．そして，この方法は，この様な形式の作品の材料となる事例（≪tres-belles histoires≫）に対するモンテーニュの興味（≪plaisir≫）の上からだけではな

く，価値判断（≪profit≫）の上から評価されているのである．モンテーニュが読書に拾った事例には，我々から見れば信憑性に乏しく，事実と考えることを躊躇するものも可成ある．しかし，事例を列挙することが≪continuelle variation des choses humaines≫を思い浮べることであるとする先の言葉や，この例の語調からも察せられる様に，モンテーニュにとって，読書で出会う事例は，時間的，空間的に拡げられた，経験的な事実なのである．

第三のタイプは，推論の展開としては第二のタイプと違った形式をとってはいないが，「エセイエ」をさらに実り多く効果的にする別の方法が展開の過程に表われている．第三のタイプの「エセイエ」においては，モンテーニュの解釈，意見のほかに，古人の思想を借用しながら，事例をつなぐ糸とする．たとえば，I-XXXIII の展開は，「古代人の意見—古い格言（前項と同種の内容）—註釈しながら問題提起—セネカの教え—簡単な註釈—事例」．この例においてモンテーニュは，セネカの「書簡」で出会った思想を事実に立脚させようと，ブーシェの「アキタニア年代記」に見つけた事例を利用する．この様に，第三のタイプは，書物に教えられている思想を事例と組み合わす「エセイエ」を意味する．そしてセンテーニュはそれを方法の意識を持って行なっている．

> Aux exemples se pourront proprement assortir tous les plus profitables discours de la philosophie, à laquelle se doivent toucher les actions humaines comme à leur reigle.
>
> (I-XXVI, p.209-80, p.158-V. et S.)

子供の教育について，モンテーニュが重要な教育科目と評価する哲学の教育方法についてのべている言葉ではあるが，この方法は，今指摘したモンテーニュの修業期の方法をまさに指している．古人の≪discours de la philosophie≫と読書から得た≪exemples≫を，出来るだけうまく（≪proprement≫）組み合わせる（≪assortir≫）練習は，すべて借物から成っていても，それはとりもなおさず，哲学を人間の諸行為との関連の中に置くことであり，個々の判断と思想の成長を促す．この「エセイエ」において，一方では，自分の事例の解釈が古人の意見と比較対照される結果，事例の中に表われている人間の行為を，古人が一層深く，適切に判断し，思想に結晶させているのを知ることとなり，

未熟な判断と思想が鍛えられてゆく．一方では，この「エセイエ」によって，思想を空疎な抽象性に陥ることなく学ぶことができる．「学問と真理は，判断なしに，我々のもとに宿り得る」（II-X, p.97-80）のであり，判断なしに宿っている学問と真理は，いつになっても現実と触れあうこともなく，我々の生きる指針にはならない．≪discours≫と≪exemples≫を組みあわす「エセイエ」において，モンテーニュは，学問と真理を判断を働かしながら学んでいるのである．

三

Ce que je desrobe d'autruy, ce n'est pour le faire mien ; je ne pretens icy nulle part que celle de raisonner et de juger : le demeurant n'est pas de mon rolle. (II-X, p.96-80)

この言葉は1578年頃書かれた章にあるモンテーニュ自身の「エセー」論である．しかしながら，先に明らかになった「エセー」の構成とその意味を念頭に置くならば，後期第二グループの代表的な章であるI-XXVI「子供の教育について」の様な，引用，引証の数は相変らず少くはないが個性的な思想の展開が主調となり始めた章について言っているよりも，事例と古人の思想の集録の姿をしている章について弁解していると考えられる．あの様な章こそ，≪raisonner≫と≪juger≫以外，モンテーニュ自身のものはなかった．しかし，事例の積極的な評価と「エセイエ」の意識にもとづいた，借物の方法的な活用は，モンテーニュの成長を効果的に強く促す結果を生んでいる．彼が読書から得た事例は，確かに生の経験的な事実ではないが，モンテーニュは経験に等しいものとして真摯に「エセイエ」を続けた．その態度は，むしろ，直接現実に判断を試みたよりも効果的であったかも知れない．彼の愛読書の著者が収録している事例は，多かれ少なかれ，すでに著者によって一度解釈され，抽象され，捨象された現実である．現実の生々しさを留めながら，しかも，ほどよく調理された現実としての事例は，渾沌として，多様な，複雑な意味を持ちながら動いている現実から，よく生きるために，正しく，深く，適切な意味をひきだすことのまだ十分に出来ない者にも，興味深く判断を試みながら学ぶことが可能だっ

たのであり，本来思想の含んでいる，人生を生きる人間の鼓動を感じながら哲学を咀嚼するに到っていない者も，この調理された現実によってならば，哲学に現実の生命を与えることができたのである．しかも事例は，現実そのものではなくても，尚現実と共通な性格を含んでいるから，やがてモンテーニュが自分の内と外の現実に向い，解釈し，判断し，思想に結晶する力を養わせる．我々は，後期第二グループの随想になるに従って，同じ様な構成を基礎にしていても，書誌的な事例が，モンテーニュ自身が経験し，観察した，自分の内と外の実例に取って代られることが段々と多くなっているのを見ることができる．事例（現実）を考察し，そこに潜む意味をひきだし，認識を得る，この様な展開をとる思索は，1580年版後期第二グループの随想ばかりでなく，第三巻に到っても，「エセイエ」の基本をなし，事例（事実）に即しながら論を運んでゆくパターンは，1580年版前期第一グループの随想にあっては，まだぎこちなく展開されているが，第三巻の様な個性的で軽妙な随想の展開を内で支える重要なパターンにつながってゆく．一貫した「エセイエ」の努力が，「エセー」の性格の変化を生み，その変貌を特徴づけているのである．自己描写がやがて「エセー」の顕著な特色になってゆくとしても，「自己」は単に作品の主題であるというより，「エセイエ」の重要な対象として作品の中心になっている．

> Mais quel que je me face connoitre, pourveu que je me face connoitre tel que je suis, je fay mon effect. Et si ne m'excuse pas d'oser mettre par escrit des propos si ineptes et frivoles que ceux icy. La bassesse du *suject*, *qui est moy*, n'en peut souffrir de plus pleins et solides. Et au demeurant c'est un'humeur nouvelle et fantastique qui me presse, il la faut laisser courir. Tant y a que sans l'advertissement d'autruy je voy assez ce peu que tout cecy vaut et poise, et la hardiesse et temerité de mon dessein. *C'est assez que mon jugement ne se defferre point, duquel ce sont icy les essais.*
>
> (II-XVII, p.456-80, p.653-V. et S.)

そしてそれは，モンテーニュが，「エセイエ」を通して，最も実り多い成果をもたらす「エセイエ」の対象として，「自我」を発見した結果である．

Or mes opinions, je les trouve infiniment hardies et constantes a condamner mon inssufisance. *De vray c'est aussi un subject auquel j'exerce mon jugement autant qu'à nul autre.* Le monde regarde toujours vis à vis, *moy je renverse ma veuë au dedans*, je la plante, je l'amuse la. (II-XVII, p.463-80, p.657-V. et S.)

「エセイエ」の方法的な努力が，モンテーニュの判断や思想を成長させてゆくと同時に「エセイエ」の性格自体の変化を導き，「エセイエ」の対象と「エセイエ」を実現する作品形式を変化させてゆくのである．

注

1) P. Villey の各章の執筆時期推測については，≪*Les Sources et l'Evolution des Essais de Montaigne*≫ TOME I. あるいは *LES ESSAIS DE MICHEL DE MONTAIGNE*, édition par P. Villey, réimprimée sous la direction et avec une préface de V.-L. Saulnier (P.U.F.) 参照.

2) II—IVは「エセー」第二巻第四章の意，p.36-80は，1580年版「エセー」(*ESSAIS DE MESSIRE MICHEL SEIGNEVR DE MONTAIGNE, A BOVRDEAVS.* M.D. LXXX.) によれば，36ページにあることを示す．本論は1580年版の「エセー」の姿を対象とし，ボルドー市版に拠る現在の「エセー」とは違っている箇所も少くないが，参考の為，p.364-V.et S. の如く，註1)中の「エセー」のページを付記する．以下同様の表記法をとる．

3) M. et J. は，*LES ESSAIS DE MONTAIGNE*, publiés d'après l'édition de 1588 par H. Motheau et D. Jouaust の版に拠ることを示す．

4) モンテーニュが表題「エセー」を決め，「エセイエ」の意識を持つに至った時期の問題がある．P. Villey は，引退（1571年2月）後程なくか1572年頃に書かれたと推定されるI—VIIIの註釈（註1中の「エセー」の各章註釈参照，以下同様）では，当章及び周囲の同時期の章には，表題「エセー」が考えられた印はないと解説している．しかし一方では，P. Villey の方法では年代決定が不確実ではあるが，前期第一グループに属すると推定可能なI—Lが，表題に使われている意味で ≪essai≫ の語が表われた最初であるとしている．従って，I—VIIIの様な，前期のさらに初期に書かれた章は除くとしても，前期第一グループの章の多くが，すでに「エセイエ」の意識をもって書かれたと考えることができる．しかし，たとえ「エセー」と題する意志を表明している章が1580年に最も近い第二グループの章であったとしても，(1)モンテーニュの「エセー」論からして，意志が表明されている章が，「エセイエ」を実現する典型的な作品であるこ

とにはならない，(2)しかも，後期第二グループに属する章の中にも，内容，形式とも，前期第一グループの章と大きく変らないものが相当ある．この様な理由から，その章と年代が「エセイエ」の意味を決める決定的なものとはなりがたく，「エセー」すべての章について，「エセー」を書くことが「エセイエ」であると仮定し，各章の性格のうちに「エセイエ」の意味とその変遷を探ることは，可能な妥当な方法と考えられる．

（M．43．天理大学講師）